

## 学習基本調査の特徴

学習基本調査は、「①学習に関する意識・実態調査(アンケート調査)」と「②学力調査」、「③都市間国際比較調査」の3種類からなっている。①は第1回(1990年)、第2回(1996年)、第3回(2001年)、第4回(2006年)と、ほぼ同一の小学校、中学校、高校を中心にご協力いただき実施した。②は①の対象となった小学校、中学校を対象に第3回、第4回で実施し、③はアジアと欧米の大都市の児童に対して、はじめて実施した。

学習基本調査の特徴は以下のようにまとめられる。

### 1. 時代による変化を把握することができる

「①学習に関する意識・実態調査」は、時系列的に調査することを目的として企画した。そのため調査項目は、時代や教育環境の変化に応じて多少の追加・削除はあるものの、ほぼ同一の項目を使用している。本報告書では1990年から2006年までの16年間で子どもたちの意識・実態がどのように変化したかという視点で分析を行っている。

調査対象は、大都市、地方都市、郡部の3地域の公立校から選定し、地域による違いがみられるようにしている。また対象学年は、小学校5年生、中学校2年生、高校2年生を選んでいる。高校に関しては、普通科を対象とし、進学状況による違いがみられる学校群を選定している。調査対象校は、4回の調査ともほぼ同一で、時系列的な変化を把握することができる。

### 2. 小学生、中学生、高校生の学習実態の比較ができる

「①学習に関する意識・実態調査」は、小学生、中学生、高校生という学校段階の違いがみられるよう、共通の質問項目を設定している。学校段階による違いを一部抜粋したもの(『第4回 学習基本調査 国内調査・速報版』)をBenesse教育研究開発センターのウェブサイト(<http://benesse.jp/berd/>)に掲載している。

報告書は、小学生版、中学生版、高校生版の3冊に分かれている。

### 3. 学力の実態を把握することができる

「②学力調査」は、実際の学力の状況を把握するために、小学生、中学生に対して算数・数学と国語のテストを行っている。学習指導要領に沿った知識・理解を測定する問題と、知識・技能を日常生活や問題解決の場面で活用する力を測定する問題を作成し、「①学習に関する意識・実態調査」の対象となった児童・生徒の一部に調査を行った。

※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

### 4. 意識・実態と学力の関係を明らかにできる

「①学習に関する意識・実態調査」と「②学力調査」の両方のデータから、意識・実態と学力がどのような関係にあるかを明らかにする。

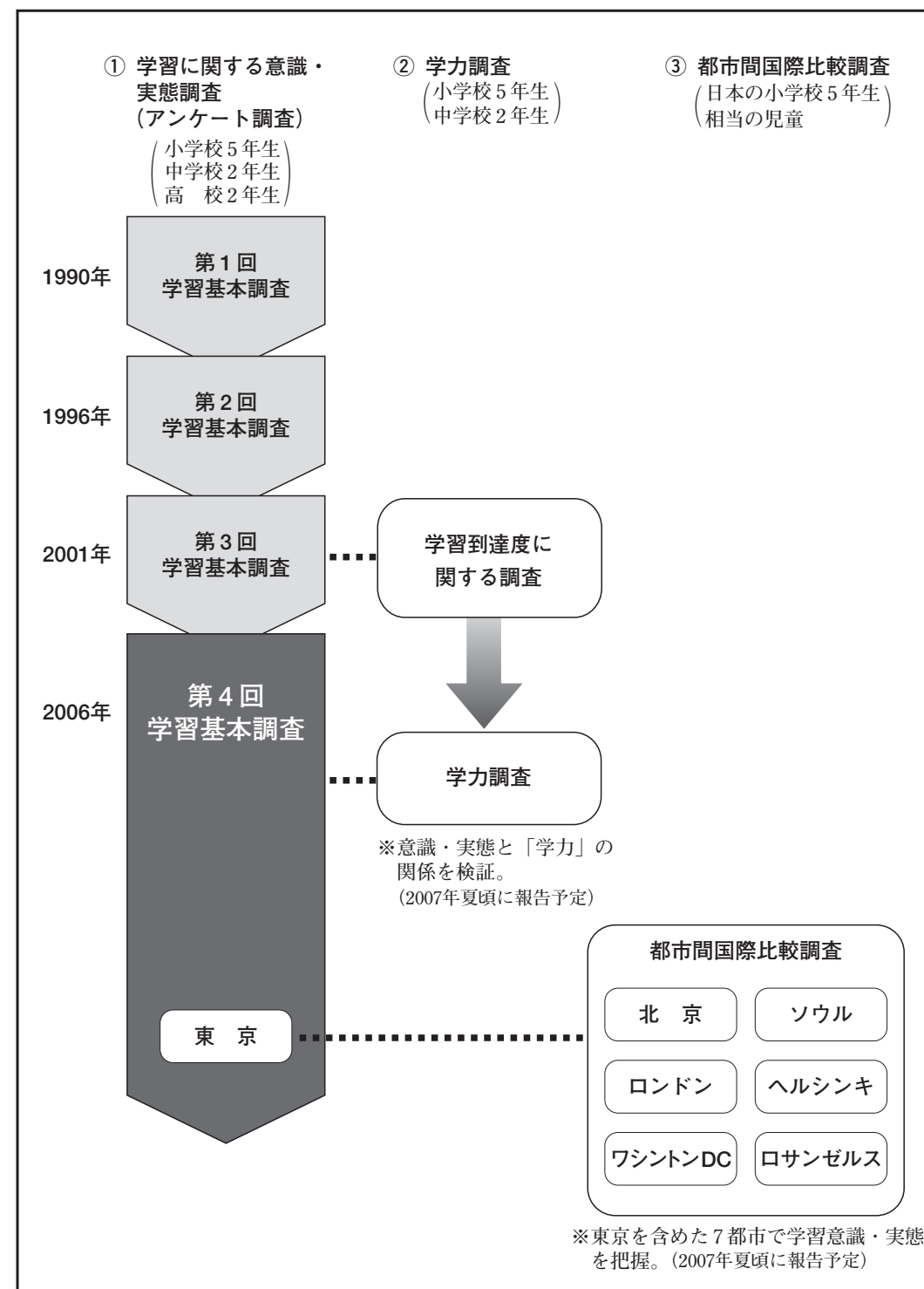
※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

### 5. 国際比較により児童の学習意識・実態の違いを把握することができる

「③都市間国際比較調査」は、アジアと欧米の5か国6都市と日本(東京)の児童の学習意識・実態の違いを把握することを目的として調査を行っている。調査対象は日本の小学校5年生相当の児童とし、調査項目は各国の教育課程や教育事情を考慮して多少の追加・削除をしているが、ほぼ同一の項目を用い、各都市間での違いがみられるように配慮している。

※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

## 学習基本調査の枠組み



## 学習に関する意識・実態調査の概要

### ●調査テーマ

中学生の学習に関する意識・実態調査

### ●調査方法

学校通しの質問紙による自記式調査

### ●調査時期

2006年6～7月

### ●調査対象

全国3地域〔大都市（東京23区内）、地方都市（四国の県庁所在地）、郡部（東北地方）〕の中学2年生2,371名

※第1回（1990年）2,544名、第2回（1996年）2,755名、第3回（2001年）2,503名

### ●調査項目

好きな教科／授業の理解度／家庭学習の時間・内容・様子／学習の方法／日常生活の中の「学習」／授業の受け方／好きな学校の勉強方法／学習塾・予備校の利用／諸学習機会の利用／学習していて感じる事／成績の自己評価／学習上の悩み／成績観・学力観／社会観・価値観／進路・進学意識／将来つきたい職業／部活動の参加状況／心や身体の疲れ／メディアの利用／家庭環境

※調査テーマ、方法、対象（調査校）、項目は、第1回～第3回調査とほぼ同じ。ただし、調査項目は時代の変化に合わせて、多少追加・削除している。

※本調査は、地域による違いをみるために有意抽出した中学校を対象とし、また時系列的比較を可能とするため、各回ほぼ同一の対象に調査を依頼している。そのため、数値は全国中学生の代表値ではない。

※本報告書で使用している百分比（％）は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。また、数値表記のしかたによって、第1回の数値がこれまでの報告書に掲載した数値から0.1ポイント前後している場合がある。

※本文中での成績の「上位」「中位」「下位」とは、7A.「現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか」という質問に対し、自己評価によって「1（上のほう）」～「3」と回答した生徒を「上位」、「4（真ん中）」を「中位」、「5」～「7（下のほう）」を「下位」とした。

### 有効回答数

(名)

	男子	女子	無回答・不明	合計
大都市（東京23区内）	380	336	0	716
地方都市（四国の県庁所在地）	429	386	7	822
郡部（東北地方）	401	429	3	833
合計	1,210	1,151	10	2,371

## 第2章の要約

### ■第1節 中学生の学習行動

#### 1. 学校での学習の様子

##### ① 好きな教科

「数学」「理科」は第3回より「好き」の回答比率が増加し、第2回の水準に戻り、理数系科目が好きな中学生が増えている。性別で見ると、男子は「理科」「数学」「体育」が好きで、「国語」が苦手であるのに対して、女子は「音楽」「美術」「国語」が好きで、理数系科目が苦手なようである（図2-1-1、2）。

##### ② 授業の理解度

「英語」「社会」の理解度は4割程度にとどまっているのに対して、「数学」「国語」「理科」は5割を超えている。また、「数学」「理科」の理解度が第1回から大幅に上昇している（図2-1-3、4、表2-1-1）。

##### ③ 授業の受け方

「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」は第1回から第4回の16年間で一貫して増加している。また「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」も第3回でいったん減少したものの、今回は再び増加し、第2回の水準に戻っている。一方、授業に集中していないとみられる逸脱行為が減った。全体的には、中学生の学習態度がまじめになったといえる（図2-1-5、6、表2-1-2）。

##### ④ 好きな学校の勉強方法

伝統的な勉強方法と思われる「ドリルやプリントを使ってする授業」の回答比率が増加している。また、自ら主体的に学ぶといった新しい勉強方法については、増加している項目もある一方、減少傾向にある項目もある（図2-1-7、8、表2-1-3）。

#### 2. 家での学習の様子

##### ① 家庭学習の頻度

家での学習頻度は「ほとんど毎日する（週に6～7日）」が、第1回19.9%→第2回18.7%→第3回18.7%→第4回28.5%と変化している。毎日家でコツコツ勉強する習慣を身につけている中学生が増加しているようだ。地域別にみると、とくに郡部で学習頻度が高くなっていることがわかる（図2-1-9、10）。

##### ② 学校外での学習時間

「2時間以上」勉強する中学生の比率は、第1回44.3%→第2回38.6%→第3回32.7%→第4回37.7%と推移している。平均学習時間は、第1回96.9分→第2回90.0分→第3回80.3分→第4回

87.0分と、今回の調査では前回より約7分増加している。宿題にかかる時間は平均38.7分で、学習時間の44.5%を占める(図2-1-11、12、13、14、15、表2-1-4)。

### ③ テスト勉強の開始時期

テストに向けて「2週間くらい前から」準備を始めるという中学生は35.8%でおよそ3人に1人いる。この比率は、第1回と比べると17ポイント近く、また第3回と比べると10ポイント程度増加している。全体的にテスト勉強開始時期の早期化が進んでいるようだ(図2-1-16、17)。

### ④ 家での学習内容

中学生の家での学習内容の中心になっているのは、「学校の宿題」(87.4%)、「学校の授業の復習」(45.1%)である。また、「学校の宿題」「学校の授業の予習」「学校の授業の復習」では、第3回まで続いていた減少傾向がみられなくなった(表2-1-5)。

### ⑤ 家での学習の様子

「出された宿題をきちんとやっていく」「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」「テストで間違えた問題をやり直す」の3項目で、7割以上が「あてはまる」と回答している。

全体的に時系列でも肯定的な回答の増加が目立ち、総じてまじめな学習態度が見受けられる(図2-1-18、表2-1-6)。

### ⑥ 日常生活の中の「学習」

日常生活の中の「学習」で、もっとも多かったのは「読みたい本を本屋で探して買う」の69.9%、つづいて「文学作品や小説・物語を読む」の53.5%であった。一方、もっとも少ないのは「美術館や博物館に行く」の10.6%であった(図2-1-19、表2-1-7)。

### ⑦ 家庭環境

親とのかかわりを示す項目をみると、「お母さんは私の成績をよく知っている」(80.9%)、「親とよく話をする」(68.2%)、「お父さんは私の成績をよく知っている」(52.7%)の順に多くなっている(表2-1-8、9)。

## 3. 学校外の学習機会

### ① 学習塾・予備校の利用

今回の調査をみるかぎり、学習塾や予備校への通塾率は大きな変化がみられない。通っている学習塾のタイプは、「補習塾」が減少している一方で、「進学塾」やその他の塾が増加している(図2-1-20、表2-1-10、11、12)。

### ② 諸学習機会の利用

「通信教育を受けている」が23.3%ともっとも高い利用率を示し、「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ」23.1%が続く。時系列で見ると、「宅配の家庭学習教材をとっている」比率が第1回に比べて10ポイント以上の減少となっているほかは、あまり大きな変化はみられない(表2-1-13)。

## 4. 学習の方法

### ① 学習の方法

「辞書(英語・国語など)を引く」「自分で単語帳・単語カードを作って暗記する」「図鑑や事典で調べる」などが減少し、手間のかかる学習方法が敬遠されるようになっている傾向が読み取れる。性別では、女子がまじめに学習している様子がわかる(図2-1-21、22)。

### ② 学習方法のタイプ

中学生の学習方法で多いのは、「復習中心」(84.1%)、「問題集中心」(77.1%)、「自分で整理しながら勉強する」(72.6%)などである。第1回から一貫して「毎日こつこつ勉強する」タイプが増えているのが注目される(図2-1-23、24)。

### ③ メディアの利用

「家でパソコンを使う」のは68.9%、「学校でパソコンを使う」のは65.4%であり、10年前と比較して大きく増加した。「家でインターネットを使って何か調べる」中学生も、半数を超える(図2-1-25)。

## ■第2節 中学生の学習観・成績観・社会観

### 1. 成績観

#### ① 成績の自己評価

成績の自己評価は、「真ん中」とその前後のカテゴリに6割近くが集中している。教科別での成績の自己評価では「国語」で3割近くが「真ん中」としているが、「英語」は半数近くが「真ん中」よりも「下位」と自己評価している(図2-2-1、2、表2-2-1)。

#### ② とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたいと思う成績は、「上位」にほぼ8割が集中し、「よい成績をとりたい」という希望は高い。またがんばればとれると思う成績でも、8割近い中学生が「上位」をとれると考えている(図2-2-3、表2-2-2、3、4)。

### ③ 成績観・学力観

時系列でみると「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(ふつうの生活志向)」が第1回から一貫して高く、第4回では6割を占める。また「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい(名門高校・大学志向)」も6割を占めている。ただし成績上位層は現状以上の成績を望んでおり、逆に下位層はある程度の成績を望んではいないものの、学校生活を楽しく過ごしたいという傾向がみられる(図2-2-4、表2-2-5、6)。

## 2. 学習していて感じること

自然や社会のしくみについて、5～7割の中学生が「すばらしい」「ふしぎだな」と感じるが、調べたり考えたりすることが好きな中学生は4～5割にとどまる。男子は社会や自然のしくみ、女子は人とのかかわり方への関心が高い(図2-2-5、6)。

## 3. 学習上の悩み

学習上の悩みのトップ・ツーは、「どうしても好きになれない科目がある」(72.0%)、「上手な勉強の仕方がわからない」(68.3%)。全体的に悩みは女子に多い。成績差が顕著で、下位層は自身の経験や内面にかかわる悩みを抱えている(図2-2-7、8、9)。

## 4. 進路・進学意識

### ① 高校への進学・希望する進学段階

高校進学希望者は全体の94.9%となっており、調査開始の1990年以降、ほぼ一貫して9割を超えている(第1回98.1%→第2回97.6%→第3回94.6%→第4回94.9%)。進学希望者の69.9%が「普通科」を、20.8%が「専門学科」を希望している(図2-2-10、表2-2-7、8)。

### ② 希望する高校のタイプ

高校進学希望者が進学したいと考える高校のタイプは、「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」(61.7%)がもっとも多く、「自分の好きな教科・科目を自由に選択できる高校」(54.5%)、「職業資格を取るのに有利な高校」(53.1%)が続いている。また、第3回で33.4%だった「進学状況のよい高校」は、今回、42.7%となっている(表2-2-9)。

### ③ 将来つきたい職業

将来つきたい職業名を具体的に書いてもらったところ、男子でもっとも多いのは、「サラリーマン」4.9%で、「野球選手」4.5%、「サッカー選手」2.4%、「公務員」2.2%が続いている。女子では、「保育士・幼稚園の先生」11.6%、「美容師・理容師」4.8%、「看護師」4.4%、「ケーキ屋さん・パティシエ」4.2%、「薬剤師」「学校の先生」「芸能人」ともに3.2%となっている(表2-2-10、11)。

## 5. 社会観・価値観

約8割の中学生が、勉強の効用を「社会で役に立つ人になるために」と回答している。小学生の回答率と比較すると、学歴主義的な社会観をより強く持っていることがわかる。しかし、「お金持ちになるために」という「経済的な成功」の手段として勉強をとらえる比率は他の項目よりも低く(49.3%)、これは小学生と同様の傾向である。成績の自己評価別にみると、上位層のほうが下位層よりも全体として勉強の効用を高く認める傾向がある。

中学生にとって、幸福をもたらす要因は、小学生同様に「いい友だち」である(92.5%)。時間選好に関する質問では、全体としては、「将来優先」「現在優先」において差異はないものの、成績の自己評価別では、上位層ほど、「将来優先」と回答する比率が高くなっている(図2-2-11、12、13、表2-2-12、13)。

## 6. 部活動の参加状況

もっとも多いのは「運動部に入って積極的に参加している」の63.7%である。大きく差が開いているが、「文化部に入って積極的に参加している」の15.9%が続く。総じて、熱心に部活動に参加している中学生が多い(図2-2-14、表2-2-14)。

## 7. 心や身体の疲れ

「あくびがでる」(86.3%)、「だるい」(76.6%)、「朝、なかなか起きられない」(75.0%)、「目が疲れやすい」(71.8%)、「あきっぽい」(71.0%)、「いらいらする」(65.5%)と、ほとんどの中学生が疲労やストレスを感じている(図2-2-15、16)。